



カントウータ

Cantuta

No. 47



Cochabamba 地方の伝統的料理、シルパンチヨ：Silpancho、ケチュア語で Sillp'anchu

The Foreign Fork <https://foreignfork.com/silpancho/>

1. ベニ・パンド両県日本人移住地探訪記
 (1) バウレ編
 (2) サンホセ・デ・ウチュピアモナス編佐藤 信壽
2. ボリビアの伝統技術を生かした土の建築 No. 2
 左官職人アルバニールとモダンな土の建築高橋慎一郎
3. 日本人が見たリベラルタ —その9— 大島 正裕

一般社団法人日本ボリビア協会

ASOCIACIÓN NIPPON-BOLIVIA

1. ベニ・パンド両県日本人移住者探訪記

(1) バウレ編

前ボリビア日系協会連合会事務局長
佐藤 信壽

2021年9月15日に、ボリビア日系協会連合会およびJICAから「ベニ・パンド両県の日本人移住」に関する調査を依頼され、2022年3月24日まで約6か月間の嘱託契約を結んだ。下記はその調査訪問記である

2021年10月9日土曜日

トリニダからバウレ町(Baures)に行く事にする。07:00にトリニダのEX-TERMINAR(旧バス・ターミナル)に行きバウレ行きのチケットを買う。09:00か10:00頃に出発するとのことなので09:00に乗場に行って待つ。11:00出発。サン・パウロ・ヌエボ(San Pauro Nuevo)で昼食を採り、16:30にサン・ラモン(San Ramon)に着く。10分ほど休憩をする。途中の眺めは壮大なパンパ(草原)である。目的地の方角に大きな虹がかかると、何となく調査に希望がもてそうな気になるから気分とは不思議なものである。只、写真を撮ろうと思ったがカメラは荷台のバックの中に入れてあったので写せなかった。

バウレに着き、宿泊所を探したが4か所とも満室との事なので公園で寝ることも考えたが、宿泊所の一つが、「中庭のハンモックでよければ使ってくれ。」とってくれたので、そこを使わ

せてもらうことにする。丁度バギー車でツーリンググループが遊びに来ているようだ。

この村も30年前の小農村の面影はなく、小さな地方都市となっている。バウレの村落の歴史を見ると、バウレ語というカリブのアラワク(Arawak)語属の言語を話すバウレ族の中心地として、紀元前3000年前頃から紀元後1500年頃まで栄えていた古代モホス(またはモキソス)(Moxos)文明に属する地域の一つであり、古代モホス文明初期にオリノコ(Orinoco)川周辺から移動した民族グループの村であるという。

今回、この地を訪れたのは、20世紀初頭のアマゾン天然ゴムの最盛期に、この地方でもゴムの採取が行われ、サンタクルスとベニの県境近くのグロリア(Gloria)湖周辺のゴム採取に多くのバウレ族の人々が駆り出された時に、バウレ村にも外国人が流れ込み、商業活動を行った歴史があるとのことであり、ペルーからの初期日本人移住者もこの地で活動したという情報も以前あったので、その痕跡を辿れないかと思っ

ての訪問である。
バウレの北にあるマグダレナ(Magdalen)には、鮫島、後藤、仁田尾という3名の日本人がいたことを、1970年トリニダ市にいた日本人が記している。また、「バウレ」や隣村の「ウアカラヘ(Huacaraje)」にも日系人がいるとの情報は、1997年に行った「日

本人ボリビア移住百周年記念祭典」(1999年)の予備調査の時に仄聞したことがある。当時は道路事情が悪く、トリニダからセスナを使うしか交通がなかったので、それ以上の具体的な調査は行なわれなかった。

ただ、この辺りは「グランパイティティ」(Gran Paititi)と呼ばれた地域の一つであり、「古代アマゾン文明」につながる古代モホス文明の主要地の一つである。「バウレ」は、興味深い地域として意識されていたこともあり、今回の「ベニ・パンドの日本人歴史調査」は、同地を訪問する良いタイミングとなった。

同地の産業としては、カカオの採取を中心として、ユカ、米、各種亜熱帯果樹の栽培が行われている。樹木伐採による森林開発を伴う牧畜業も盛んである。

10月10日(日曜日)

宿泊所の部屋が決まって、荷物を部屋に移してから町と周辺を散策する。

09:00 から1時間ほどだったが、長閑な田舎町で見る程のものは何も無かった。また、町の人に聞いても「日系人はいないと思う。」とのことであった。町はずれの川は乾季で流れは無く、水溜まりがあるだけだったが、ベニ県の他の川とは少し違い、川底に砂利が有り貝殻が散乱していた。宿に戻ってもWiFiがないので、明日の便でマグダレナに行くことにして、テルミナルに行き、

明日の便のチケットを買う。

午後墓地へ行って墓碑の姓名を見て来る。「Arima」という姓があったが、日系かどうかの確認ができない。また、数年前からルレナバケ(Rurrenabaque)やトリニダ(Trinidad)で日本人の姓に「Tacana」という姓があるかと聞かれたことがあり、その意味が分からなかったが、この地に「Tacana」という姓があることで質問の意味が理解できたものの日系であるかどうかは不明である。また、2004年頃に「『Abe』と言う日系人がグアヤラメリン(Guayaramerin)にいるか」との照会を受けた時に、同地の日系人に確認したところ、「日本人のところに遊びにきていた<Ave>という人がいたが日本人では無くバウレの人で、ブラジル側に行った後<Abe>のスペルに変わり、日系人だということになった。」との話を聞いたことがあった。<Ave><Abe>の墓碑があるかとも思ったが無かった。他の周辺の村にあるのかもしれないが・・・。

夕方、宿に来た人が「<オニ>という姓の家族がいるが、日系ではないか。」とのことであったが思い当たるところは無い。とすると<Arima/有馬><Tacana/高奈><Ave/阿部><Oni/大仁>など、日系と勘違いされてもしかたがないような姓があるということが分かった。

19:00 シャワーを浴びて、部屋に戻る時、中庭から三日月か四日月か月が綺麗

麗に見えたので、アルコール飲料を買ってきて、月見をしながら明日からの予定を考える。

10月11日（月曜日）

バスの出発は、15:00 なので、それまでデータの整理をする。まず、年表にまとめ直す作業をしたが、手持ちの資料を読み直す中で新たな疑問がでてきたりして捗らない。

14:50 にテルミナルに向って歩いていると、親切な中年男性がバイクで送ってくれた。田舎町の素朴さである。なにしろ、この町にはバイク・タクシーでも1台しかないとのことである。18:00 マグダレナに着く。途中でバスを乗り換える時には要領が分からず、横の座席の人が教えてくれなければ、他のところへ行く事になっていたかもしれない。モト・タクシーで宿へ行きメール等をチェックする。

10月12日（火曜日）

07:00 に起床し町を散策する。町の周辺は深い森であるが、この地のWebサイトにはゴムに関する記述はない。川に橋の建設中であるが完成期限が延びているようである。墓地へも行ったが日系の姓は見当たらなかった。宿で、明日一番のトゥルフィ（乗合タクシー）の予約を頼み、部屋でデータ整理をする。

10月13日（水曜日）

昨日の予約の時には09:00頃出発と言っていたトゥルフィは、10:00 出発になったとの事、10:00 に迎えが来て乗場に行ったが、積荷その他の段取りで11:00 の出発となった。12:30 にサンラモンに着く。リベラルタ行きのフロッタ（長距離バス）の通るところまで行き、その辺の店で聞くと、「既に2社のバスは通過したが、もう1社のバスが通るはずだ。」とのことで待つことにする。グアヤラメルン行きのトゥルフィが通ったが満席であった。16:00 まで待っても来ないので、ここでも一泊することにして宿を探す。

プラサの近くのホテルに行き町を散策する。墓地に行つて墓碑を見たが日本人の姓は見当たらない。ホテルに戻り、「この村に日系人はいないか」と聞くと、「隣の家にくチムラ」という日本人がいる」とのことなので、隣家を訪問する。そこの人に聞くと、くチムラというのは、その人の孫の嫁になる日本人で、今は家族とサンタクルスに住んでいるとのことであった。また、その人は、「自分はくダン」という姓で日系だと聞いているが、祖父に当たる日本人がペルーから来たと聞いているほかは何もわからない。」とのことであった。

10月14日（木曜日）

08:00 に隣家に行き今回の調査の概要を説明し、関心があればメールで連絡してくれるように伝えて、バスの通

る街道へ行く。昨日、バスの通過を聞いた店で水を買うと「昨日、あなたが去った後、30分ぐらいでフロッタが来たから、もう少し待っていたらよかったのに。」と言われる。

10:00 にユニフィカド社のフロッタが来たのでそれに乗る。10:30 にサン・ホアキン (San Joaquin) のテルミナルで昼食休憩を30分とる。12:00 にプエルト・シレス (Puerto Siles) の渡し場でマモレ (Mamore) 川を渡ると、ユンゲーニャ社のバスが故障で止まっている。「昨日、もう少し待ってこれに乗らなくて良かった。」と思う反面、「乗客はどうしたのだろうか。」とも思い、そういう経験を逃したことを少し残念に思うところもあった。18:00 順調にリベラルタに到着。疲れた！

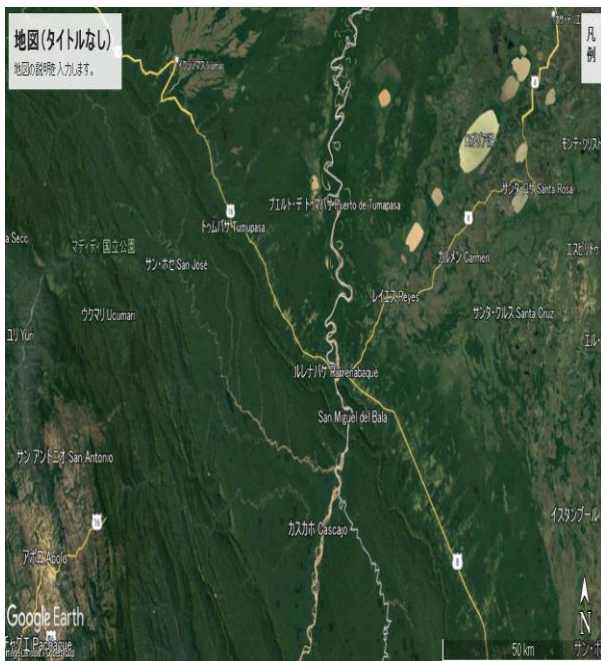


写真1-1 サン・ホセ、ルレナバケ周辺のGoogle Earth
地図

(2) サンホセ・デ・ウチュピアマナス編

2021年10月25日(月曜日)

ルレナバケのホテルを 06:30 にチェックアウトして、対岸サン・ブエナベントウラ (San Buenaventura) への渡し舟乗り場へ行ったが、2, 3年前に橋が出来たので今は運航していないとのことである。近くでココアとエンパナダを食べ、朝食とした後、タクシーの多く通るメイン通りに行く。程なくして来たタクシーで対岸のサン・ブエナベントウラ (San Buenaventura) のテルミナルに行きトゥムパサ (Tumupasa) 行きの乗合タクシーに予約する。07:10 に定員となって、出発。08:30 にトゥムパサに着く。この町も大きくなりすっかり様子が変わってしまった。教会前のプラサも大きくなり10年前の面影は無くなっていた。

トゥムパサでサン・ホセ・デ・ウチュピアマナス (San Jose de Uchupamonas) 行きのタクシーについて尋ねると、「4輪駆動の車両を持っている人に聞いてみるから待ってくれ。」という。20分ほど村を散策して、タクシー乗り場に戻ると「行くという人が一人いて、サン・ブエナベントウラから来るので1時間ほど待っていてくれ。」とのことである。10:30 にタクシーが来て、出発することになるが、「昨日、強風が吹いて雨が強く降ったので、アチャ (斧) を借りるから少し待ってくれ。」とのことと更に10分程待ち、

出発となる。道の途中は、下記写真の様な状況で、アチャが必要になるかも知れないとの言葉が理解できた。



写真 1-2 トウムパサとサン・ホセの間の道路



写真 1-3 風雨の後で道路を塞いだ倒木を切断して通行を確保

12:10 にサン・ホセに着く。タクシーの運転手が「誰か訪ねる人があるか？」と訊くので、「昨日ルレナバケで、日系人会会長の Sra. マチルデ・タクシ (Matilde Tacusi) さんから、『サン・ホセに着いたら、ドリ (Dolly) さんを訪ねれば協力してくれる。』と聞いているので、その人を訪ねる予定であるが、わたしの携帯電話はTigoなのでここでは使えないから、あなたの携帯電話を貸してくれないか。」と言うと、「ドリ

はここのアルカルデサ (村長) だから協力してくれるだろう。彼女の電話番号は持っているから電話してやる。」と言い、電話の後で彼女のいる所まで案内してくれた。

ドリさんに初対面の挨拶をして。彼女に誘われるままに彼女の家に行き昼食を御馳走になる。食後に旦那さんが宿屋まで案内してくれた。皆親切である。

このサン・ホセは、堀内伝重の「聖母河畔の 16 年」の「サンホセ・デ・ウチュピアモナス村に入る」の記述のある村である。その後、堀内はここに日本人移住地を造ろうとして、この村に戻り、村の有力者の娘と結婚したが、1917 年か 1918 年にこの村で病死し、その計画は実現しなかった。彼と行動をともにしていた、鹿児島県人の岩本、加藤、大峰の 3 人がこの村でコーヒー園を経営していたようで、それについてルレナバケにいた故小野寿さんがボリビアの日本語月刊誌「日系ボリビア」に書いた「奥アマゾンのミステリー」の中に次の記述がある。

「今でも寂しい田舎村のサン・ホセ・デ・チキアマナスにも、岩本、加藤、大峰の 3 人が入植し、もっぱらコーヒー栽培に従事していた。日本人入植時には各町の間に道はなく、皆それぞれ孤立していて、その連絡は歩くか、馬に乗って行く外はなかった。唯一の交通路は河川であった。そのため当時、サン・ホセ・デ・チキアマナスは河川による交通が便利で

あった。岩本、加藤、大峰の3人は年に一度、生産物のコーヒーをイカダに積んでリベラルタの市場に出していた。サン・ブエナベントゥーラの広瀬さんも一緒になり4人でイカダを漕いで、唯一の市場であるリベラルタ町へ持って行き高価に売りさばっていた。

(中略)

サン・ホセ・デ・チキアマナスの岩本さんは、1932年から1935年にかけてパラグアイとの間に起こっていたチャコ戦争の時に、コーヒー採集に来ていた女の子二人に一人ずつ男の子を生ませた。入植して20数年後40歳の時であった。

戦争が終って兵隊達が帰って来て、彼等の恋人に岩本さんが一人ずつ子供を生ませていることがわかり、二人が憤慨して岩本さんを殺す計画を立てた。岩本さんは逃れることができず自殺した。

その時、サン・ブエナベントゥーラにいた郡長は馬に乗ってサン・ホセ・デ・チキアマナスに行き、岩本さんの所有物を全部没収し、金持ちだといわれていた岩本さんの金を探したが見つからなかった。その友人の加藤さんが隠していると自分勝手に決め、加藤さんをアポロ(Apolo)に連れて行き、刑務所に留置させた。加藤さんは3年後に釈放され、サン・ホセ・デ・チキアマナスに帰って来たが、友人の大峰さんも死亡しており、自分のコーヒー園はバルベッチョ(休耕地・藪/barbecho)になっていた。家族と大峰さんの子供等を連れてサン・ブエ

ナベントゥーラに移住した。誰も知らなかった事件であった。

私がサン・ブエナベントゥーラに移住した時、一人の老人がしばしば訪ねて来て、色々な話をされていて、やさしい親切な人のように見えた。その頃もう80歳を超えていた。その後、その老人がまだ若い時イトゥラルデ郡(Iturralde)の郡長をしていて、日本人の岩本さんや加藤さんを苛めた人だとわかってびっくりした。こんな優しい人があんな事をしたとは思われなかった。」

サン・ホセの高齢の方は、この岩本さんの事件について知っていて、「岩本さんの死後、女性はその婚約者と結婚し、岩本さんの子供も自分たちの子供として育てたので、彼等は日本人の姓は引き継いではない。」と話してくれた。このような経緯があると、その子孫に「あなたたちは、日系なのですよ。」とは敢えて言うことはできない。「日系の意識を持つか、非日系の意識でいるかは、自分達家族の問題なので、誰かが『日系人の調査に来ている日本人がいる』と噂することで、訪ねて来るか来ないかの成りゆきに任せることにした。そして翌日の午後この村を出発することにして、移動車両の手配をドリさんに依頼した。

しばらく滞在して、この村が、気候が温暖で山に囲まれ日本的な雰囲気のある村である、ということは納得できた。村の財源は、「マディディ(Madidi)国立公園の中にある観光事業の運転手やガイドなどであり、昨年のコロナ・

ウイルスの後は、川で金を探すのと、自給作物のユカやバナナなどを栽培しているだけだと言う。

岩本さんの事件については私なりの解釈を付け加えて、以下のように村の人に話した。「岩本さんが逃げられないと知って自殺したのではなく、彼は60才を過ぎて(小野さんの説では40才だが、私の資料では60代になる)、若い女性を妊娠させたのは自分の間違いである、もし、婚約者の彼等が自分を殺せば彼等は犯罪者になる、自分の間違いから若い彼等を犯罪者にすることはできない、それであれば自殺するのが最善の処置である、と考えたのではないか、これが日本人の考え方である。もし、保身を考えるのであれば金は持っているのだから、労働者に警護させて、警察に訴えて彼等婚約者を抑えるということもできたはずだが、なぜそうしなかったかを考えて欲しい。」

私がこう話すと、聞いてくれた村の人たちは、それが日本人の「ハラキリ」ですか。といって幾らかは納得してくれた様子であった。

10月26日火曜日

06:00に起床し、07:00頃散歩していると、プラサの十字路に何人かが立っているの、「ここからトゥルフィでもでるのですか」と聞くと、「今日は学校の行事でマラソン大会をやっているので、道の脇にいてください。」とのことで、マラソン大会を見学する。07:30に宿に戻って、今回の報告書を書いていると、セノン・リマコ・ナビという人が訪ねて来た。

聞くと、「昨日ドリから、日系人の調

査に来ている日本人がいるというので訪ねて来たのだ。」とのことである。彼に、「日系ということをしてどのようにして知っていて、日系であることをどのように思っているのか」と尋ねた。

彼曰く「以前、リベラルタの日系の女性が訪ねて来て話してくれた。その時に、自分の日本人の姓について、ここでは、イワモトと聞いていたが、彼女曰く「イワモトという姓はないから、ヤマモトだ」ということで、自分は、本当の事が知りたいのだから何か知っていますか。」とのことである。

まあ、そこまで知っているならと思い故小野寿さんの話と堀内伝重の話をしやる。「自分の血縁上の祖父が自殺したというのは始めて聞いた。しかし、多分本当だろう。父や自分と外見の似た人がもう一人いた。その人は、アブナ(Abuna)の方に行った後、サン・ボルハ(San Borja)に住んでいると聞いた事がある。今の話からすると、自分の伯父になるということですね。」

「そうだと思う。しかし、若者の将来を思い自殺した岩本さんと、それを許して自分の子供として育てた加藤さんと、どちらにも愛と思いやりがあったことを感じないか。」

「そうだと思う。今、あなたと話して、血統上(日本人)の祖父にも、書類上の祖父にも、尊敬を持てるようになった。これからは、書類上は日系人と認められなくても、日本に親しみを持っていきたいと思うので、もし、日本人でここに遊びに来るような人がいたら、自分に連絡するように教えてください。できるだけの協力をします。」とのことであった。

このような会話の後で、「息子もバイクを持っているので、息子にモト・タクシーをさせますから昼頃まで部屋で待っていてください。」とのことで、資料をチェックしながら待つことにした。12:40 に彼の息子というのが来て、バイクでトゥムパサまで送ってくれた。

今回の調査では、サン・ボルハの太田氏が、ブラジル国境に近いサンタ・ロサ・デ・アブナからラパス県との州境に近いサンタ・ロサ・デ・ヤクマに移り、サンタ・ロサからサンボルハ周辺の建築に携わり、サンボルハでもオオツボ、その他の日本人と仕事をしたと聞き、この日もセノン氏から彼の祖父がアブナへ行き、その後サンボルハに移ったという話を聞いた。

それにしても、アブナとサンボルハはどのようにつながるのだろうか。今回の調査のテーマとは離れるが、興味が持てる疑問点である。

(つづく)



写真1ー4 サンホセとサンホセ・デ・ウチュピアモナスの位置 (Google Earth)

2. ボリビアの伝統技術を生かした土の建築 No. 2

左官職人アルバニールとモダンな土の建築

土の空間工房SoBaTo

高橋 慎一郎

◆土と水を操るボリビアの左官職人

皆さんは、我々の衣食住を支える土と天からの自然の恵みである微細な水を巧みに扱い、人々を魅了する壁や床を生み出す「左官」という職人をご存知だろうか。

日本の左官職人は、軽快な鰻（コテ）さばきが印象的で、土をはじめ、藁、砂などの様々な素材が混ざった泥を数ミリの厚さで壁に塗り、繊細な仕上げ工事を行う。一般的な日本の住まいの建設では大工職人が棟梁であり、土蔵の建設では、左官職人が棟梁となる。

一方、ボリビアでは、住まいの施工現場において、基礎、土壁、屋根など多くの工事を左官職人が一手に引き受ける。左官職人が棟梁となり、工事現場を切り盛りするのである。手や足を存分に使って日干し煉瓦などの建築部材を作り、建築の構造に関わる部分も担う。持つ鰻は、木鰻、煉瓦鰻やステンレス鰻など数個に限られ、何百丁も鰻を持つ日本の左官職人とは違う。日本とボリビアでは、左官職人の仕事の内容や左官職人の仕事に対する考え方が異なっており、ここではボリビアの建築現場で見聞いたことなど、少し述べてみたい。

ボリビアの左官職人を、スペイン語では「アルバニール」と呼ぶ。親方は「マエストロ」、手元（手伝い）、もしくは弟子に近い人は「アユダンテ」である。彼らと

は別に、土、藁、水を混ぜ合わせた泥を型枠に流し込み、引き抜き、太陽光の下で天日干しさせて日干し煉瓦を専門に作る「アドベーロ」や、石膏を水に溶いた白い左官材料、石膏プラスターを壁や天井に塗ることを専門にした「エスタカトーレス」など日本にはない職種の左官職人もいる。

こうした左官職人は、その日の太陽光の強さ、気温、湿度、風など気候の変化に耳を傾け、日干し煉瓦や土塗り壁などの左官仕事の状態を確認する。日々の機微を感じ取る感受性豊かな人が多く、彼ら・彼女から発せられる言葉や嗜みは、人々を魅了することが多々ある。

詩人の茨木のり子さんは、「二人の左官屋」※というタイトルで、次のような詩を詠んでいる。

きてくれた左官屋

長髪に口髭

白地に紺の龍おどる日本手拭何枚か使い

前あきの丸首シャツに仕立てて着ている

あちらこちらに鱗飛び

いなせとファシヨナブル渾然融合

油断のならないいい感覚

足場伝いにやってきた彼

窓ごしにひょいと私の机を覗き

「奥さんの詩は俺にもわかるよ」

うれしいことを言い給うかな

19世紀チャイコフスキーが旅してた時

1人の左官屋の口ずさむ民謡にうっとり

やにわにその場で採譜した

アンダンテ・カンタービレの原曲を

口ずさんでいたロシアの左官屋

彼はどんななりをしていたのだろう

※「茨木のり子集 ことの葉2」筑摩書房

ボリビアに滞在中、こうした詩に現れているような多感な左官職人と仕事を行い、一緒に汗をかきながら、仕事を行い、たくさんのかことを学んだ。今回はまず、僕がお世話になった印象深い2人の左官職人を紹介したい。

1人は、親方サンティアゴ・コルケ氏（写真2-1、2、3）。彼とは、3つの工事現場でともに仕事をした。かつて銀の産地として栄えたポトシ出身で、小さい頃から、焼き煉瓦や日干し煉瓦の製作をしていたという。

当時、彼は20代前半で、土、石灰、セメント、石膏などを扱う多くの左官仕事をこなし、好奇心旺盛な性格とハングリー精神は印象的であった。素晴らしい仕事と陽気な性格から、彼の周りにはいつも多くの人が集まっていた。朝早くから工事現場に来るのはもちろん、親方の1日分の給料に匹敵する値段のセメントが、現場倉庫から泥棒に盗まれていないことを確認するために休日も工事現場を訪れるなど、仕事熱心であった。彼から学んだことは、ボリビアの左官仕事はもちろんだが、モノを大事に労わり、使うことであろうか。例えば、使い古された乾電池の中心の炭素棒を取り出し、建物に印をする鉛筆替わりにしてい

た。心から尊敬できて、人間的な豊かさを持つ親方である。

もう1人は、親方の下について数々の左官仕事をこなしていた、手元のフーリョ・ガラルサ氏（写真2-4）。年齢は50代であった。忘れられないのは、日干し煉瓦を作るための泥練りの速さと丁寧さである。左官用の鍬を使って、トラック1台分もあるような土と水とイネ科のイチュという藁を混ぜ、あっという間に日干し煉瓦が作れるように練ってしまうのだ。重たく扱いが難しい泥の仕事は重労働だが、フーリョ氏は苦言をはくどころが、時には笑顔を振りまき、さっと泥を練ってしまう。その仕事ぶりは遅しかった。

「土と水と藁を混ぜるだけでしょ」と、皆さんは思うかもしれないが、10,000個以上の日干し煉瓦を作るための大量の泥を適度の水加減で練るには、熟練した左官技術が必要である。プレインカ時代から続く、こうした左官の伝統的技術を現代的に、改良しながら作業できる左官職人は、かけがえのない存在であり、名工と呼ぶにふさわしいと思う。



写真2-1 左官職人の親方 サンティアゴ・コルケ氏



写真2-2 サンティアゴ・コルケ氏製作の日干し煉瓦



写真2-3 サンティアゴ・コルケ氏によって施工された石膏プaster塗り天井



写真2-4 微笑みながら泥を練る、手元の左官職人 フーリョ・ガラルサ氏

◆左官職人によるモダンな土の建築

最近のボリビアでは、左官職人によるモダンで華麗で斬新な土の建築も実践されている。

政治経済の中心地で事実上の首都はラ・パスであり、標高3,593mに位置する都市である（憲法上の首都は、石灰クリ

ームを刷毛塗りした白壁の街スクレ)。その街で、ボリビアで唯一土塗り壁の材料を販売している会社が、TecnoClayである。その代表で、土塗り壁の普及に努めるのがフランクリン・アンテサーナ氏技術指導者である左官職人がルイス・フェルナンド氏だ。

フランクリン氏は、左官の名工、三重の松木憲司氏や、岡山県で活躍中のアメリカと日本の左官に詳しい左官職人、ホイットヒューター・カイル氏の土の建築のワークショップに参加して、日本の土塗り壁の技術も取り入れながら、現代の住まいに似合う洗練された土塗り壁を提案、実践している。

2022年2月、ラ・パスを取り囲むアンデスの頂部に広がった標高4,150mに位置したエル・アルトと呼ばれる地区で、フランクリン氏たちは、施主の家族に対して、早朝から夕方まで土塗り壁講習会を開催した。フランクリン氏が土塗り壁の理論を教え、土塗り壁の基本である荒壁塗りから上塗りまでの技術指導をルイス氏が行った。技術を学んだ施主の家族は、茶色の土塗り壁に時計を組み入れた軽快で都会的な壁を作り上げた。



写真2-5 時計と梅茶色の土壁が一体となったデザイン

フランクリン氏はこのプロジェクトについて、次のように述べている。

「我々、TecnoClayでは、土塗り壁の技術に興味がある家族に対して、指導をしていきたいと考えている。我々としても各家族が土塗り壁の技術を学んだあと、創造性に溢れ、唯一無二のどのような壁を作るのか大変興味がある。土は、内装を彩る素材として非常に大きな可能性を持っていると思う」。

ボリビアを歩いていると、荒い土で壁を塗った建物を数多く見かけた。それは確かに素朴で趣きがあった。しかし、現代の快適な住まいに必要な、細かい土で仕上げた清潔感のある優美な塗り壁を見ることはあまりなかった。ボリビアの住まいを更に快適にするために土塗り壁の普及に努めるフランクリン氏たちの活動は、伝統技術の継承・発展にも繋がり、とても尊い仕事に感じられた。

◆土の蓄熱によって、夜間も快適

同じくラ・パスで低所得者層の土の住まいを改善するプロジェクト「Laka

Uta(※)」に携わっている建築家のザウル・サンドバル氏の自邸も、モダンな土の建築であった(写真2-5)。ラ・パスの中心市街地区から、中古ワゴン車を改造したバスに乗り込み、約30分走ると、洒落たブティックなども目に入る高級住宅街に着く。サンドバル氏の住まいはこの「カラコト地区」郊外の小高い山の中腹に位置する。

建設されたのは1999年で、当初は84m²

であった。その後増改築が繰り返され、現在は2階建てで、延べ床面積250㎡程度である。構造は、基礎はコンクリート、壁は日干し煉瓦、屋根は型枠なしで施工が可能な薄い日干し煉瓦のボールド屋根の構法が使用されている（写真2-6、7、8）。現在の空間は1階には食堂、台所、居間など家族が共用する部屋が、2階には、主寝室と子供部屋の個室といったプライベートな空間が配置されている。室内は、日干し煉瓦の壁をナイロン布で綺麗に磨きあげ、その上に白茶色などの塗料を塗って仕上げていた。

ここを訪れた際、サンドバル氏は、土の建築の利点や欠点を話す中で、この住まいの冬の室内環境に対して、次のように述べてくれた。

「屋根と壁に日干し煉瓦を使って土で室内を包み込み、トップライトから太陽光を取り入れている。そうすることで、昼間、太陽の熱を土の蓄熱体が吸収する。外部が寒くなるにつれて、この土の蓄熱体から熱が室内に放出されて、夜間も大変暖かく快適である。」

壁だけでなく、屋根にも日干し煉瓦が使われ、土で包まれた住まい。足を踏み入れると、安心感と心地よい空気感に心が和み、忘れられない空間であった。



写真2-6 サンドバル氏の自邸 外観

(※)Laka Uta(ラカ・ウタ):現地の先住民のアイマラ族の母語アイマラ語でラカは「泥」、ウタは「家」を表している

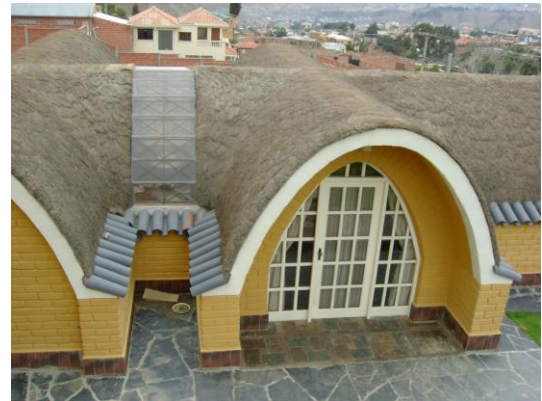


写真2-7 日干し煉瓦を用いた屋根面とトップライト



写真2-8 トップライトからさんさんと降り注ぐ自然光が明るく、開放感のある室内を生み出す

◆分厚い土壁で快適な室内環境を

次に標高2,580mに位置する第3の都市コチャバンバで活躍する建築家、エドゥガー・フランツ氏を紹介したい。同市の中心部や郊外を散策していると、築数百年を経た土の建築に出会う。エドゥガー氏は左官職人、ネルソン・コカ氏とダビット・コカ氏の両兄弟と共に、この地域で伝統的な土の左官技術の一つ、日干し煉瓦を使い、土壁を雨風から守るように大きくはり出した屋根が印象的な住まいを建設した（写真2-9）。

別の住宅のプロジェクトでは、3人の左官職人、住まい手であるコリン・アンドリュ氏と共に、練り積み壁と呼ばれる

構法を採用している。練り積み壁の上には、土に黄色と青色の天然鉱物の顔料を混ぜた青磁色の泥を塗ってあった（写真2-10）。その塗り壁は、つややかで気品に満ち溢れた魅力に包まれているように感じられた。

土という素材を躯体に用いる建築の魅力を、エドゥガー氏は次のように述べている。「我々は、土や藁といったローカルな素材にもっと着目しなければならない。そうすることで、エコロジカルでローエネルギーな住まいを獲得することができる。それらの素材は再利用可能で、過去の失われた技術再生に繋がり、文化的な価値もあるだろう」。

仕上げではなく、室内環境の調湿性能や熱環境性能を高める意味で有意義な、分厚い土の構造体に挑戦し続けるエドゥガー氏。地産地消でエアコンに頼らない快適な室内環境を作り出し、現代的で深い安堵感を感じる住まいを生み出すべく活動している。

◆コンクリートから版築へ

最後に紹介するのは、タリハで活動する Estudio Kaiser Arquitectura代表の建築家、メヒトヒルト・カイザー氏の自邸である。

ボリビアの南部に位置するタリハは、ワインやブドウの蒸留酒シンガニの産地として有名である。その郊外、東にグラダナキビール川、西にサン・ロシンダ村を臨み、トウモロコシ畑が広がる農村地帯にカイセル氏の自邸はある。壁が構造体であり、そのまま内装仕上げになる構法である

版築壁を用いている。土が織りなす横縞模様が象徴的で、土の原始的な美しさを持つ。



写真2-9 土塗り壁で仕上げ日干し煉瓦の住まい



写真2-10 高貴な気品を感じる青磁色の土塗り壁

この版築壁は、左官職人の親方アブラン・ロドリゲス氏を中心となって建設した。木や鉄の型枠の中に乾いた泥を入れて、木の棒などで突き固めて壁を作る。ボリビアの各地にみられる伝統的な建築構法の一つと言えるだろう。日本でも、奈良県の法隆寺の土塀などに伝統的な版築壁が見られ、その印象的なデザインから、日本の建築界でも、最近注目されている。

カイザー氏は、この360mmの厚さを持

つ版築壁の住まいについて、次のように述べている。「ワインなどの貯蔵庫、住まい、教会といった、土で作られたこの地域の伝統的な建物にデザインのヒントを得た。遺跡になっているものもあるが、それらの建物は、長い時間の流れを感じさせてくれ、土という素材が大自然の繋がりを思い出させてくれる。そういった点から、新しい時代を切り開く可能性を秘めた建築の作り方だと思う」。

建設敷地の土というローカルな素材を使い、少ない型枠を転用して作られる土の構造体は、コンクリートに代わり、次世代型の建築の構造技術になるのではないかと感じられた。



写真2-11 版築壁に取り囲まれた室内



写真2-12 版築工事担当した左官職人、アブラン・ロドリゲス氏

◆土の建築の豊かさを引き継ぐ

ボリビアには、民芸品のように簡素だが、職人技の魂を感じる建物から、建築家が設計した細部までデザインされた洗練された建物まで、プレインカ時代から現代まで、連綿と続く土の建物が数多く存在する。これらはコンクリートに比べれば雨に弱いかもしれない。しかし、屋根の軒を出すというように、設計や素材の配合に注意した上で、土を塗った壁を維持補修しながら住み続けることは、建築をはじめ、いろいろなことを労わる心もはぐくむと思う。

少し古くなるが、2001年の国勢調査によれば、ボリビア国内では55%の住まいが土壁で出来ているそうだ。土壁は、時には風化して味わいを増し、ノスタルジックな雰囲気演出する。時には手間暇かけて塗られた平滑で光沢のある土壁は艶のある美しさを持つ。こうした素晴らしい土壁を纏った建物は、古来より左官職人が生み出してきた。

土の建築の風景の豊かさに触れながら日本の約3倍の広さを持つボリビアの広大な大地を閑歩してみると、日本とは大きく異なるこの国が紡いできた文化や歴史の多彩さを再確認することが出来、とても心が躍る経験であった。

(つづく)

以上は、雑誌『月刊さかん』などに寄稿した記事を改稿した文章、新しく書き下ろした文章やボリビアでの仕事や旅で見聞したエッセイなどをまとめた自費出版『チャスキ 〜ボリビア 土の建築奔走記〜』2021より内容を抜粋したものです。

3. 日本人が見たりベラルタ

ーその9ー

財団職員

明治大学島嶼文化研究所客員研究員

大島正裕

新垣庸英〜越境のひと（続き）

3. リベラルタまで

1918年10月、新垣庸英は、シリングエロ（ゴム採取人）になると決心した。『新垣庸英日記』（以下、『日記』）によると、1922年頃までシリングエロを続け、その後リベラルタに入る¹。そして1923年にはリベラルタを出て、妻を出迎えるためペルーのリマ市に移り、同地で第2次世界大戦後の1952年まで過ごすことになる（その後、ボリビア・サンタクルスに移る）。短期間で、近隣の日本人ネットワークを使いながら生計を立て、経済的成功を目指しながら、ひたすら移動と越境を繰り返すところに逞しさや強かさを感じる。

この新垣が動き回った期間は、第1次世界大戦も終わり、ボリビアのゴム産業が衰退期に入っていたときにあたる。ボリビア中央政府は、北部アマゾン地域を当初は軽視しており、世紀転換期に保守党（ラパス派）と自由党（スクレ派）間での内戦もあり、ブラジルに比べてアマゾン地域への進出が遅れた。このため、ゴム需要の最盛期だった19世紀後半にゴム産業から十分に利益を引き出せなかった。だが、それでも1890年～1910年代に第1次ゴムブームを迎え、ボリビアは1915年には国庫収入の15%をゴム産業から得ていたのである²。政府は開発の難しい北部アマゾン地域を探検者や冒険的商人に任せ、コンセッション法

を策定し、開発を請け負わせる仕組みとした。この中で、頭角を現したのが、後にボリビア北部に移住した日本人達の生活に大きな影響を及ぼすことになったニコラス・スアレス（Nicolás Suárez Callaú）である。1910年代、リベラルタ近郊のカチュエラ・エスペランサ（Cachuela Esperanza）を拠点にボリビア北部のゴム産業を支配したスアレス商会は、リベラルタからパンド方面、ペルー国境沿いにいたるまでの広大なゴム林を所有した。同商会の研究の第一人者マリア・デル・ピラル・ガマラ

（María del Pilar Gamarra Téllez）の研究によると、1916年時点での統計では、コンセッションや他の所有者からの移譲で全28地所12,550エストラダを所有し、所有地の総面積は、5,051,842ヘクタール（＝50,518平方キロ）に及んでいる。これは関東の面積32,420平方キロの約1.5倍以上の凄まじい広さである³。



写真3-1 スアレス家の本拠地カチュエラ・エスペランサの観光客用の地図⁴

後日、新垣庸英は、シリングエロであった期間について語っている。新垣によると、スアレス商会は、シリングエロに半年分の食料を貸与し、彼らは、その食料をもってゴム林に入った。どのゴム林で作業する

のかもスアレス商会から指定があり、新垣達はバラカ (barraca⁵: ゴム採取の拠点) に入り、前号で見たようにゴム液を採取し、ゴム塊を作り、半年に1度バラカを出て、川船で運び出し、その際に食料も補充してもらう。新垣は、「金は一文もいらなかったんです」と言っており⁶、スアレス商会は、シリングエロを効率的に動かす就労システムを整備していたといえる。



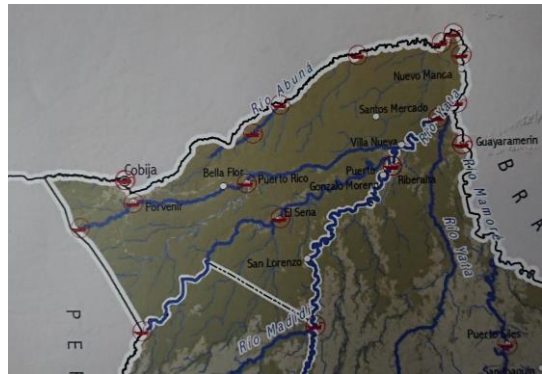
写真3-2 バラカの写真⁷

ゴム採取の報酬は、金貨で支払われたと言われているが、との質問に対しては、新垣はこう答えている。

「金貨ではないが、ボリヴィア金ですが、しかし金貨も自由自在です。向こうでもボリヴィアの平価です。〔中略〕それはその頃12円くらいで買えました。日本で1文です〔筆者注: 1文は約12円〕。英国の1ポンドです。ボリヴィア金の10円か12円です。勘定はボリヴィア金です。それだけ値打ちがあったわけです。今ちょっと思い出しましたが、1ヵ年働いて日本に送ったらボリヴィア金は日本金より高かったんです。1,000円くらい送ったのが、日本にいたら1,200円くらいになったそうです。」⁸
今のパンド県西部のサンフランシスコ

(San Francisco) でゴム採取に携わっていた新垣だが、この頃の『日記』に頻繁に名前が出てくる地名が、パンド地方で日本人が多数居住していたポルベニール

(Porvenir) である。1920年9月28日、新垣はポルベニールの大城盛良を訪ねた。ここで、リベラルタの上原松四郎(「日本人が見たりベラルタその6」)に登場、1915年にリベラルタ日本人会の初代書記(ナンバー3)、後の1919年に会長就任)が、12月(に(1918年4月に別れた)従兄の庸信と共に、大城の農地(チャコchaco⁹)を買い求め、ポルベニールで働くという話を聞いた。因みに新垣が動き回っている9月はアマゾンでは乾季の盛りに当たり、8月~9月は、ゴムの樹液が少なくなるため、樹木を休めるのが一般的ようだった¹⁰。このいわば休閑期を利用して、新垣は動き回っていることになる。



地図1 ポルベニールの位置¹¹

その後、10月3日に一旦帰宅して、それから今度はカルメン (Carmen) のバラカにいる大城を訪ねたが、結局、大城には会えず帰宅した。その後、年の瀬の12月26日に滋賀県人田中氏が新垣を訪ねて言うには、上原が商品をポルベニールまで船で輸

送しようとしていたが、船が故障して、ポルベニールの下方に停泊しているということであった。

年が明けて1月3日、新垣は仲間とポルベニールに赴くと、ポルベニール北東部にあるバヒオ（Bagio）の高沢宅の近くに上原の船は停泊中であり、そこで上原によく会うことができた。

1月11日にポルベニールにやってきた上原と共に、大城盛良所有の農地12ヘクタール（0.12平方キロ、東京ドーム約2.6個分）を同地のコメの収穫後に1,000円で譲り受けることでまとまり、新垣もこの話に乗ることになったようで、上原は後日、自身が他人を寄越して共同経営すると語った。

2月12日、ひとりでポルベニールに向かった新垣は、翌日同地に到着し、16日から大城の農地に一人で小屋を建て始めた。しかし、大城はなかなか契約に応じない。2月29日、上原と合流し、農地のことを相談したところ、上原もあまり好ましく思わず、同農地の支配人アルフレッドと話をしても、今は、まだ契約できないという話であったため、上原と新垣は、結局、この農地を買わないことに決めたい。

このように新垣は農業への転身も考えたようだが、結局、その後もシリングエロを続け、1921年9月9日、新垣は88アロバ（1アロバ＝約15kg）、比嘉加那は72アロバ、そして上原徳明は56アロバ、当山牛は50アロバのゴムを受け渡した。マリアの研究から、1924年のスアレス商会所有のゴム林における採取高を確認することができる。

調査によると、新垣が就労していたと思われるサンフランシスコでは、34名のシリングエロが投入され、年間の一人当たりの採取量が48.24アロバとあることから、全員が平均以上の採取量を上げており、特に新垣は飛び抜けた成果を達成していることが分かる¹²。

しかし、新垣たちの仕事が軌道に乗った頃、「それからどんどんと今まで高かったゴムの値が、どんどんと毎日毎日下る時です。ところがわしらはゴム経営の方を少し覚えてゴムを出すようになったら、ますます下落して・・・」¹³。これを契機に上原徳明は、コビハへ移り、翌年には新垣もゴムの価格下落の煽りを受け、シリングエロを諦め、リベラルタに転住した。



写真3-3 リベラルタへの到着¹⁴

さて、ここまで詳細に新垣の動きを追いかけてきたが、ボリビア北部の日本人移住者に典型的にみられるのは転業である。特にペルー下りの移住者にとって、ゴム採取で一角千金を夢見たものも多かったであろう。当初ゴム採取人（シリングエロ）として身を立てようとしたもの達が、リベラルタに流れ込んで、都市型の商売、あるいは農地を購入して野菜等を作るに至る。新垣がリベラルタに移住した1922年頃とい

うのは、 ゴム景気のピークも終えていたが、リベラルタ日本人会自体は盛んに活動している時期に当たっており、町の近隣で農業を行うか、町で小売店やレストランを経営するか等が主流になっていた。

この時期の職業の変化に注目したのが、元琉球大学教授石川友紀氏である。1917年ゴムが第1次世界大戦の影響もあり、活況を取り戻したこともあり、同年のボリビアの職業別日本移民在留数は577人、この内、200人がゴム採取に従事している（全体の34.7%）。このほとんど全ては北部アマゾン地域の日本人居住者である。ところが、1924年の統計では、ゴム採取人は568人中35人（全体の6.2%）と激減している。これに対して、農業従事者は1917年の96名から、1924年には135名と増加していて職業の変遷が垣間見られる。下記表は、ボリビア全土の邦人の職業別であるため、リベラルタだけの数値だけではない点を差し引いても、この時期に転職が進んでいったことが読み取れる。

表1 在ボリビア邦人の職業変遷(1917年→1924年)¹⁵

1917			
	職業	在留者数 (女性数)	構成比
1	ゴム採取者	200(0)	34.7%
2	農業	96(1)	16.6%
3	雑貨商	82(2)	14.2%
4	農場労働者	40(1)	6.9%
5	商店員 事務員	30(0)	5.2%
6	木挽・大工	15(0)	2.6%
	総数	577(24)	100.0%

1924				
	職業	本業者数*	構成比	本業者の 家族数(女 性)
1	農作	135	23.8%	39(17)
2	履物・雨具 雑貨販売	102	18.0%	24(15)
3	牧畜・搾乳	45	7.9%	—
4	料理店 飲食店 席貸業等	39	6.9%	10(6)
5	家事被雇人 料理人	38	6.7%	19(12)
6	護謨栽培	35	6.2%	—
		568	100.0%	147

¹ 新垣は「護謨価格下落のため千九百二十二年頃護謨林を引き上げてリベラルタ町へ行き同地で三年間働いた後大正十二〔1923年〕年六月ペルーのリマ市へ出て妻と合流して」と述べているが、リベラルタに入ったのが、1922年でそれから3年間リベラルタにいたら、1925年（大正14年）までリベラルタにいないとはならないので、この当りは新垣の記憶違いか何らかの誤記の可能性はある。

² María del Pilar Gamarra Téllez, *Amazonía Norte de Bolivia Economía Gomera (1870-1940) Bases económicas de un poder regional. La Casa Suárez*, 2018, p.211.

³ Gamarra Téllez, p.171.

⁴ Duran Mendoza, José Luis (ed.), *Cachuela Esperanza, Una puerta a la historia y la leyenda, La Revista*, Año 1, Número 1, 2010. 最終頁掲載のガイド地図より。

⁵ ここでは、非常に分かりやすくバラカを定義した文章を引用しておきたい。「スペイン語のバラカ（英語のバラック）は、本来は「小屋」「農家」の意味だが、ここでは屋敷の総称である。母屋には屋敷の親方が、まわりの小住居には使用人たちが住んでいる。この聖母の川〔マドレ・デ・ディオス川〕の旅の途中、あちこちの集落を訪ねてみて、親方と使用人たちがひとかたまりになって生活しているこのような「バラカ」がこの川筋では生活の基本単位だとわかった。バラカの使用人たちは親方に生活物資を現物で支給してもらい、採取したゴムやカスターニャの実を親方に納めていた。大きなバラカになると、背後のジャングル数十キロにわたって使用人たちの家が散らばっていた。」

（向一陽『アンデスを越えた日本人 聖母の川を下る』（中公新書、1980年）、141 - 142頁。）

⁶ 日本人ボリヴィア移住史編纂委員会編『日本人ボリヴィア移住史』、1970、332頁。

⁷ Gamarra Téllez, p.281.

写真は、1920年のパンド県タワマヌ（Tahuamanu）川沿いのベジャ・フロール（Bella Flor）のバラカ。

⁸ 日本人ボリヴィア移住史編纂委員会編『日本人ボリヴィア移住史』、1970、332 - 333 頁。

⁹ チャコとは、ゴム・バラカにおける農業用の小農地を意味する。（Gamarra Téllez, p.438）

¹⁰ 向一陽『アンデスを越えた日本人 聖母の川を下る』（中公新書、1980年）、151 頁。「ゴム採りにも季節があり、四、五、六、七月と十、十一、十二月にしかゴムは採らない。八月と九月は乾季の盛りでゴムの樹液が少ないときなので、木を休ませる。一三月は雨季の盛りで、ゴム液に水が混じるので作業をしない。」（同頁）

¹¹ 地図の出典は以下文献 *Atlas Socioambiental de las Tierras Bajas y Yungas de Bolivia*, Editorial FAN, 2015.

¹² María del Pilar Gamarra Téllez, *Amazonía Norte de Bolivia Economía Gomera (1870-1940) Bases económicas de un poder regional. La Casa Suárez*, 2018, p.362.

¹³ 日本人ボリヴィア移住史編纂委員会編『日本人ボリヴィア移住史』、1970、332 頁。

¹⁴ 向一陽『アンデスを越えた日本人 聖母の川を下る』（中公新書、1980年）、189 頁。向一陽氏率いる奥ア

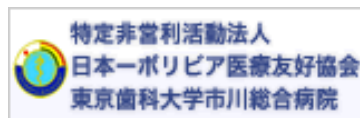
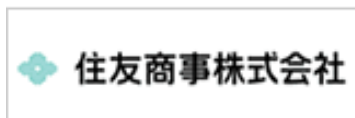
マゾン探検隊が、リベラルタに到着したときの写真。川から眺めたリベラルタの様子。

¹⁵ 石川友紀「ボリビアにおける日本移民の地域的分布と職業構成の変遷—第二次世界選前を中心に—」『琉球大学法文学部紀要・史学・地理学編』35 号、1992 年、50、52 頁の表から筆写が作成。なお、1917 年の統計は在留者数。1924 年は本業者数と家族が分かれているので、両年の比較は簡単ではないのだが、ゴム採取者については、1924 年の統計では家族なしとしているので、両数字を比較してもそれほど大きな問題はないだろう。1917 年から 24 年にかけてゴム採取者が減少していると結論付けてよいと考える。

編集委員

椿 秀洋 杉浦 篤 細萱 恵子

◎日本ボリビア協会維持会員一覧◎



Copyright© 2002-2021

一般社団法人日本ボリビア協会
ASOCIACIÓN NIPPON-BOLIVIA

All rights Reserved

（本誌の全ての掲載記事、写真、図表などの複製、転載、改変は禁止されています）